研究ノート

羽出浦の歴史と民俗㈦

安部　弥右衛門

(6)　白石口説

頃は寛永十六年よ、野にも山にも子は持ちおかれ。万の倉より子は宝ぞや、親の敵を娘が討つは。これは稀れな世に珍しや、国は何処よと尋ねて聞けば。国は奥州仙台の国、時の殿さん政宗公で。家老片倉小十郎様の、支配内なる川崎街道。坂田村とは申する所、僅田地が十二石高。作る百姓の名は与茂作と、娘姉妹持ちおかれして。姉がお里で妹がお菊、姉が十六その妹が。取りて十三花なら蕾、頃は六月下旬の頃よ。娘姉妹打ち連れ立ちて、親娘三人田の草取りに。到る所は川崎街道、草は僅な浮草なれど。草を取る取る草もの尽くし、稲のはかまに無情の風が。〽触りて落ちる露の玉、〽死ぬる命は夢にも知らぬ。姉が歌えば妹が囃す、妹歌えば姉さん囃す。歌の拍子で取る田の草を、〽一草取りては後に投げ。〽二草取りては畦に置く、頃は六月炎天なれば。上は照りつけ田は煮えかやる、汗はしどろとまたせぐり出る。笠の小陰で街道は知れぬ、国の代官団七さんの。通りかかるを夢にも知らぬ、妹お菊が投げたる草が。通りかかりた侍さんの、お召しなされし袴の据を。少し汚すが無礼となりて、そこで団七目に角立てて。目には角立て怒りの眼、斬って捨てるとひしめきなさる。それと見るより父与茂作は、〽溜まりし水で手を濯ぎ。〽田の畦そろりと這い上がり、〽七重の膝を八重に折り。〽白髪頭を地につけて、慈悲じゃ情じゃお侍様。どうぞ命はお助けなされ、姉が十六その妹が。取りて十三花なら蕾、西も東も知らざる子供。この子一人を殺したとても、さほど貴方の手柄にならぬ。この子一人を助けたとても、さほど貴方の落度にならぬ。日頃短気な侍なれば、言えど語れど耳には入れぬ。覚悟致せと鯉口切りて、太刀は村正三尺二寸。それを見るより父与茂作は、父の与茂作武士の子なれば。三間すさりて鍬を取り、一つ二つは鍬でも受ける。運の尽きかな父与茂作は、打ち込む太刀を受け損じ。三つ目にまた斬り立てられる、畦を枕に斬り伏せられる。それをみるより姉妹子ども、命物種逃げるがましよ。えたることなら畦道伝い、何

処に行たやら行方が知れぬ。後を団七追っかけ見れば、何処に行たやら行方が知れぬ。行方知れねが刀は鞘に、鞘に納めて屋敷に帰る。後で哀れは姉妹子ども、よをよかよをとわが家に帰る。わが家帰りて只泣くばかり、母もその節大病なれば。重き枕を漸く上げて、何を泣くぞや姉妹娘。言えば姉妹涙で語る、申しこれいな母上様よ。わしの父様今日街道で、国の代官団七さんの。手にはかかりて最期を遂げた。父の最後を細かに語る。父の最期を聞くより母も、〽気をもみ上げて胸にしゃく。〽いとしなるかな絶命となる、〽母様申し母様よ。　今日父様に捨てられて、〽貴女に別れ何としよう。〽娘姉妹取り付きすがり、泣いつ歎いつなされるうちに。一家一門皆打ち寄りて、歎く中にもまたある人は。なんぼ泣いても歎いたとても、死んだ両親帰りはすまい。野辺の送りを致そじゃないか、野辺の送りを致すといえば。お寺様にも届けにゃならぬ、和尚様をば招待なさる。切りつ刻んず棺こしらえる、棺は立棺四方はしがん。四方四隅につばさの鳥よ、旗や天蓋・龍・龍（たつ）までも。風に靡かせ殊勝な送り、野辺の送りもほどなく済んで。七日間は憂いの座敷、枕引き寄せさも寝もやらぬ。そこでお菊が申すことに、何と姉さん思案はないか。言えばお里が申すことに、わしも前からそう思えども。お前遠慮でわしゃ言いませぬ、ここで武芸の稽古はできぬ。花のお江戸を尋ねて上り、名ある名人師匠にとりて。棒の一手も覚えたなれば、どうかしてなりあの団七を。親の敵を討ちたるなれば、死んだ冥土の父母様に。回向手向けん追善供養、言えばお菊も打ち喜んで。そこで二人は腹をも合わせ、さらばこれから旅装束よ。夏にかたびら冬着る布子、手貫・手拭・水かけ脚絆。三節こめたる寒竹の杖、笠の上着き同行二人。家（うち）を出る日を吉日として、今日は日も良いお江戸に上る。父の位牌を姉さんかるい、母の位牌を妹がかるい。〽それご恩も深い姉妹が、〽知らぬお江戸を尋ねて上る。暫し間は道中なさる、急ぎゃほどなくお江戸に着いた。江戸で浅草観音様の、〽さて浅草や浅草や。〽浅草前の上（かみ）の辺、芝の神明ある茶屋茶屋に。名あるお茶屋にちょと立ち寄りて、申しこれいなご亭主様よ。こんなお江戸で剣術指南、一とよばれるさる御方を。教え下されご亭主様よ。言えばご亭主がきゃらりと笑うて。味なこと言うて物問う子ども、愚言うなよお江戸の町を。十里四方は四面の町よ。町が八百また八町。大名揃えば六十余州、それに旗本また八万騎。なんぼあるや

ら積もりは知れぬ、たとえがたなきとは言うものの。今で名高いあるあらましを、言うて聞かすぞよく聞け娘。言えば姉妹打ち喜んで、〽さて剣術や剣術や。〽剣術一と申するは、〽柳生但馬の守様よ。〽槍は山本善兵衛さんよ、あるが中にも安部十次郎。棒の名人それゆる一人、〽それ軍学流派のその道は。〽北条淡路の守様よ、〽一流たつあしりょうふりょう。〽柔術(やわら)に兵法・鎖鎌、〽槍・薙刀や手裏剣や。〽万事を得たる名人は、〽榎の町でも名の高い。〽由井橘の正雪よ、これを尋ねて行きゃれよ娘。言えば姉妹打ち喜んで、尋ね回るが正雪館。屋敷上りて案内とりて。玄関口にて両手をついて、願い上げますわれわれどもは。こんなお家にご無心ござる、お茶の給仕の奉公なりと。または水仕の奉公なりと、ぜひに奉公宜しく頼む。それと聞いたる正雪様は、あいの唐紙さらりと開けて。ぜひに奉公頼むと言えば、国は何処で名は何某か。国を申せば恥かしけれど、国は奥州仙台の国。時の殿さん政宗公で、家老片倉小十郎様の。支配なされし川崎街道、坂田村とは申する所。僅田地は十二石高、作る百姓の与茂作の娘。今年六月下旬の頃に、国の代官団七さんに。不慮なことより父をも討たれ、母もその節相果てました。余り心の切なさ故に、花のお江戸を尋ねて上り。名ある名人師匠にとりて、棒の一手も覚えたなれば。どうかしてなりあの団七を、親の敵を討ちたるなれば。死んだ冥土の父母様に、回向手向けん追善供養。言えば正雪お目を覚ます、草で育ちた百姓の娘。親の敵を討つ志、武士も及ばぬ天晴れな者。すぐに正雪家来につける、名をば改め宮城野・忍。何と宮城野妹の忍、夜と昼との差別はないぞ。武芸大事と致せよ二人、言えば姉妹打ち喜んで。ここではやらんおらんだ流儀、一手教えりゃ二手は覚え。二手教えりゃ三手まで覚え、日にち経つのは手間暇いらぬ。最早修業も五か年となる、頃は正月元日の朝。稽古始めの目出度い朝に、今日は二人の修業の手並。暫し間は拝見致す、名ある門弟四、五人寄せて、姉と妹に合わせて見れば、名ある門弟四、五人どもは。姉と妹に斬り立てられる。そこで正雪打ち喜んで。大願成就致したぞ、成業喜べその門出に。江戸の町な正雪様は、姉と妹に祝儀をなさる。姉に陣笠また鎖鎌、鎖鎌にて一丈五尺。鉄(かね)の鎖に鉛の分銅、それに手裏剣妹の忍。白柄薙刀身は行康の、そこで正雪奥方様が。姉と妹に餞別なさる、〽さて紫や紫や。〽紫ちりめん抱え帯、綾の鉢巻紅襷。襷袂は身ははなやかに、対の装束

白無垢小袖。それが内儀のはなむけ衣裳、道を見送るそのためとして。家来熊谷三郎兵衛よ、松田弥吾七・坪内但馬。これを三人相添え下す、さらばこれから白石に下る。名残り惜しさとあと宮城野が、忍ぶ涙で袖をも絞る。それに五人のその人々も、共に涙で袖をば絞る。〽それわが故郷や故郷や、

わが故郷は奥州の。人の便りで白石に下る、急ぎゃほどなく白石に着いた。旅の疲れもほどほどにして、すぐに片倉小十郎様の。屋敷訪ずれ案内乞うて、願い上げますわれわれどもは。江戸の町なる正雪様の、家来熊谷三郎兵衛と。松田弥吾七・坪内但馬、申しこれいな片倉様よ。これなる娘はこのご領地の、坂田村とは申する所。僅か田地が十二石高、作る百姓の与茂作の娘。覚えござるか五か年あとに、志賀の一流団七殿に。不慮なことから父をば討たれ、母もその節相果てました。親の恨みのその切先を、上によろしくお願い申す。聞いて片倉おん目を覚ます、草で育ちた百姓の娘。親の敵を討つ志、武士も及ばぬ天晴れなもの。すぐに片倉小十郎様は、お上様には願いに上がる。事の子細を細かに語る、聞いて驚く政宗公は。さても見事なその志、武士も及ばぬ天晴れなもの。用意致せの御上意が下る、すぐに片倉小十郎様は。急ぎ急いでわが家に帰る、わが家帰りて触れ状書いて。五十四郡に触れ状回す、街道街道に高札立てる。場所を改め白石河原、二十四間は四面の矢来。西と東に大木戸開けて、西の木戸より志賀団七を。東木戸より宮城野・忍、その日役人名は兵右衛門。矢来回りの警固の役は、警固役人七百人よ。それに足軽三百五十、都合合わせて千五十人よ。矢来内なる検視の役は、江戸の町なる正雪様の。家来熊谷三郎兵衛、松田弥吾七・坪内但馬。その日集まる見物人は、男女のその差別ない。

集まる人は野も山も、〽里も河原も人橋かかる。雨のあしをも揃えた如く、その日団七いでたち見れば。白い鉢巻・白装束で、太刀は村正三尺二寸。刀ひっ提げ矢来の内に、西の口から早入り来る。娘姉妹打ち物見れば、姉が手裏剣また鎖鎌。鎖鎌にて一丈五尺、それに鉛の分銅つける。妹忍の打ち物見れば、白柄薙刀身は行康の。〽さて紫や紫や、〽紫ちりめん抱え帯。綾の鉢巻緋紅の襷、襷袂は身は華やかに。小づま掻い取り矢来の内に、東木戸より早入り来る。お上様から御上意が下る、何と団七姉妹娘。これは前から仕置いた通り、敵討つとも討たぬとも。太鼓合図に勝負を致せ、お上様から下さる膳は。きじの膳にてゆるぎの飯よ、あとに三つの茶碗

の水を。これを飲み干し地につけおいて、そこで姉妹申することに。申しこれいな団七さんよ、覚えあろうが五か年あとの。父の恨みのその切っ先を、ふしようながらも受け取りなされ。言えば団七高笑いする、草で育ちた百姓の子ども。敵討ちとは片腹痛い、返り討ちぞや一度にかかれ。言えば姉妹申することに、何と言わんす団七さんよ。山椒・胡椒は小さいが辛い、関の孫六身は細けれど。綾も断ちます錦も切れる。まだも切れます金襴緞子、飲んで見なされこの鉄釘(かな)を。油断なさるとそなたの首は、前にころりと落ちますほどに。そんな自慢は勝負のあとよ、言いも終わらず合図の太鼓。聞いて駈け出る妹の忍、振るは薙刀早水車。受けて団七大上段に、太刀は村正すらりと抜いて。手者と手者との出で合いなれば、雉と鷹との蹴合うが如く。追いつ追われつ火花を散らす、その日集まる見物人は、〽こぶしを握り芽を噛む。〽忍忍と力を添える、余り勝負のつかざる故に。お上様から不思議をいれて、時を改め休みの太鼓。そこで駈け出る足軽四人、二人互いに引き分けられる。そこで団七改め見れば、鎖かたびら膚には着込み。何と団七武士たる者が、卑怯千万早脱ぎ取れと。そこで団七面目はない、時も改め二番の太鼓。聞いて駈け出る姉宮城野よ、〽心得たりと志賀団七は。〽太刀を構えて横一文字、手者と上手の出で合いなれば。龍と虎との争いの如く、追いつ追われつまた渡り合う。かねて宮城野手裏剣上手、〽さて打ちたつや。打ちたつや。〽打ちたつ手裏剣雨あられ、運の尽きかな志賀団七は。右の眼に手裏剣打たれ、左眼にまた打ち込まれ。〽眼はくらむ血は走る、〽盲斬りぞや死に物狂い。矢来回りを狂うて回る、姉の宮城野気合とともに。右の腕を早打ち落とし、忍忍と此処ぞと招く。左腕は忍が落とす、姉が音頭で首掻き落とす。西に向いて両手を合わし、南無や冥土の両親様に。敵団七討ち取りました、嬉し成仏よろしく頼む。その日集まる見物人の、どっと賞めたるその賞め声は。天に響いてまた地に響く。

(7) 小藤口説

父は長良の人柱にて、〽鳴かずば雉も撃たれまい。〽うたるまいとて身はおしどりの、父は優しきかしんの言葉。古き歌にて詠みおかれしが、国は何処よと尋ねて聞けば。国は長州赤間ケ関よ、関は千軒並びはないが。ちょとかたむく鶴屋の娘、名さよ優しく小藤というて。なれど小藤は奇麗な生まれ、目許口許襟立ち抜いで。殊に鼻筋ごさんの器量、立てば

芍薬座れば牡丹。歩む姿はさも百合の花、やつす夫の伝えを聞けば。町は本丁泉屋さんの、末の代をとる梅治郎さんよ。なれど梅治も奇麗な生まれ、年は十八角（すみ）前髪よ。恋の手習まず初めには、恋という字をちょと書き初めて。恋に知恵づくいろはのほの字、四十八字のそのかなづかい。頃は三月花見の頃よ、桜狩りとて住吉さんの。一の宮にて幕などうたせ、敷くもとりどり花毛氈よ。ある日みまちの若い衆方は、われもおれもと花見物よ。のむろ・提げ重・茶弁当持って、飲めよ騒げよ若い衆方よ。お酒いけねば肴に小唄、あるが中にも梅治郎さんは。小藤見るより早や恋となる、絞り手拭い小藤を招く。人の小蔭に小藤を呼んで、申しこれいなのう小藤さん。今の花見で目につく花は、遥か向いの若木の桜。なんと色よく咲いたでないか、下に下がりて糸藤の花。あれを一枝ただ惜しゅござる、言えば小藤はほやりと笑うて。何と言わんす梅治郎さんよ、わしのようなるさもなきものを。人に想われ花恥かしや、たとえがたなきとはいうものの。今まだ藤も主無いからは、落花せぬうち蕾のうちに。折りて取らんせ梅治郎さんよ。言えば梅治郎打ち喜んで。さても届いたのう小藤さん、わしとお前は憂曇華の花。回り逢うたがひまわりの花、靡き合うたが川端柳。みどり合うたが秋野の薄、よれつもつれつみずはのかずら。ああれ嬉しや二人の性は、寿命が短い朝顔の花。梅治親達白菊の花、もはや梅治も背丈ぬんで。一夜明けたら元服させて、嫁をもろうて咲き分けの花。いたきまちとは萬屋さんの、二番娘のお花というて。なれどお花も奇麗な生まれ、これが梅治にあいもらわれて。親もやる気でその身も行く気、日なち極めて茶の取り交わし。小藤聞くより気は石竹の、どうかしてなり梅治郎さんに。逢うて語りて胸晴らさんと、思うその日の夕暮れ方に。町の端れで梅治に出逢う、小藤見るより顔ふり穏す。そこで小藤が申することに、穏しなんすな梅治郎さんよ。顔を穏せば姿で見知る、お前先月末中頃に。嫁のお出でさぞお目出たい、わしも陰から喜びまする。お目出たいとは申したけれど、わしの身はまたどうなされます。池の鯉鮒わしゃ水離れ、池の鯉鮒水には逢うが。わしとお前はどう逢われよか、言えば梅治が申することに。わしの定めた妻こではない、親の定めた妻こであれば。持たにゃ親様不孝にあたる、持てばお前に義理立ちません。義理とはりとでわしゃ死にまする、わしは冥土に赴くほどに。お前長らく生き永らえて、思い出す日を梅治の

日じゃと。茶湯茶水はよろしく頼む、言えば小藤が涙にくれて。何と言わんす梅治郎さんよ、〽只今までの詫び言葉。〽許しなんせよ梅治郎さんよ、文を書く折りどういうて書いた。死なば一緒と書いたじゃないか、お前冥土へ赴くなれば。道の邪魔にはなりますけれど、わしも冥土のお供を致す。言えば梅治も打ち喜んで、さても届いたのう小藤さん。そこで二人は腹をも合わせ、さあさこれから死装束よ。梅治その夜の死装束は、下に白無垢中には綸子。上に着るのは格子の縞よ、帯は当世博多の帯よ。三重に回してやぐらで留めて、裾に白足袋なら緒の草履。お寺参りと手に数珠掛けて、二尺一寸落としに差して。夜の九つ夜半の頃に、そろりそろりとわが家を出でる。小藤その夜の死装束は、下に着るのが白地の綸子。中に着るのは白羽二重よ、上に鹿の子の大振袖よ。帯は当世京六緞子、二重回して吉弥で留めて。とんと叩いて後に回す。裾に白足袋紙緒の草履、お寺参りと手に数珠掛けて。銚子盃袂に入れて、夜の九つ夜半の頃に。そろりそろりとわが家を出でる、出逢いましたがないちょうの町。ひとの為にはうき小路町、二人為には剣の山よ。急ぎゃほどなく妹背の川よ、〽手に手を取りて渡り込む。〽渡り上がりて睦事話、鳥は古巣に帰るといえど。二度と帰らぬ赤間ケ関よ、名残り惜しさとあと打ち眺め。まだも急げばお寺の門よ、寺の門に腰打ち掛ける。それ刃で死ぬるわれわれが、〽浮かび給えよ頓生菩提。寺のほとりに墓所がござる、墓の前にて座を組立てて。梅治差しつ差されつ末期の水よ、小藤飲んでは梅治に渡す。そこで飲んでは小藤に渡す、またも梅治が差そうとすれば。夫婦鳥も小藤が申せしことに、申しこれいな梅治郎さんよ。わしとお前夜明けになれば、可愛い可愛いと鳴き別れます。わしとお前もあれあの如く、夜明けなりゃまた追手がかかる。辛い憂き目を見ましょうよりも、早く死ぬるが二人のみめよ。言えば梅治がすと立ち上がり、二尺一寸すらりと抜いて。花の小藤をただ一刀で、小藤死骸に腰打ち掛けて。雲よ霞と腹十文字、返す刀でとどめを刺して。梅と小藤は一度に落花、後でお花ははなあけ嫁女。

(8) お梅伝治口説

ほんにそれそれ仏法の、摂州津の国浪速の里に。村のその名は西しりげ村、雪やあられは音高けれど。わらや雨とは露ほど知れん、人の浮き伏しわが身の上も。たとえがたなきしつけの里よ、草で育ちた梅とも知れん。なれどお梅は奇麗な

生まれ、目許口許襟たち抜いで。殊に鼻筋五三の器量、心島田やさて髪の上。昔松風村雨などや、お梅十四の冬頃よりも。伝治心は折り折り心、積もる思いを春打ち過ぎて。明けて三月花見の頃よ、どめき帰りをこれこなさんと。交わす枕の夜は長けれど、つけつ回せば月夜も闇も。親の許さぬ比翼の契り、思いながらもさて恐ろしや。恐ろしいやらまた嬉しさの、恋の蕾の開いた折りは。顔に紅葉がちりりやぱっと、伝治心はうぐいすの鳥。ある日お梅は伝治に向い、申しこれいな伝治郎さんよ。お顔見るのは此の夜が限り、物も言わずにただ殺してと。言うたら伝治は打ち驚いて、なんと言うぞやこれやいお梅。様子語れと早せき立てる、言うたらお梅が申することに。お前さまには知らせはないか、わしはお前の兄八さんの。嫁にもらわれ今日夕暮れに、ふぼん極まる吉日定め。眉を落として鏡の祝い、それを聞くより気は針箱の。底を叩いた女の心、親の言う口つこうとすれば。愛しお前に添うことならぬ、二世というなら未来で添うと。袖や袂に石拾い込む、前の小川に最後を急ぐ。急ぐところを伝治が止める、そこのお梅のうろたえものよ。独り死ぬるは心中ではない、肥後や薩摩に行く身ではない。同じ流れの水飲むからは、時節松虫また転び寝て。笑い合うことあるぞよお梅、沖の鴎も磯千鳥して。とかく母さま機嫌を取れと、言うたらお梅も納得をして。やがて嫁入りして行きまする、去年あたりはさゃらでもないが。今年ばかりは口説(くぜつ)の種よ、うめもあらしきいきよにかかる。薄い契りの兄八郎兵衛は、なれどうちよりやり長持の。愚痴な男に身は挟み箱、是非に及ばぬ因果な縁よ。お梅に八郎はしょねんの枕、曇る空かのかの伝治郎は。胸にひのせのもよぎの花よ、二人寝た夜の寝姿見れば。愛し可愛いと言うたのはうそよ、壁に伝うのは今の気心。憎や腹立つ気はだいなんの、波は細れどせんよのほむろ。燃えたほむろでくる夜を明かす。明けりゃ五月の田植えの頃よ、茜襷や紺前掛けに。家内(やうち)残らず前田の田植え、家(うち)じゃお梅が茶をたいている。そこで伝治は茶取りに戻る、お梅姉さんまだ茶は出ぬか。出たら出花をもろうと問えば、そこでお梅が申することに。申しこれいな伝治郎さんよ、お前心は薄茶の出花。わしの心は濃い茶の出花、わしの濃い茶が所望とあれば。いれて上げます嗜みの茶を、こちにこちにと手に手を取りて。奥の一間の青畳にて、枕二つにござ一枚で。一つ二つの話が済んで、お梅伝治は白河夜舟。うまい所に兄八郎は、鍬を担いでつかつか帰る。お梅お梅と二声三声、そ

こでお梅は返事ができぬ。奥の一間を透かして見れば、お梅伝治は白河夜舟。何がたまろか兄八郎は、部屋に駈け込み箪笥を開けて。急ぎ取り出す鮫黒鞘の、二尺一寸すらりと抜いて。抜いた太刀風お梅に浴びせ、返す刀でわが咽喉笛を。えぐるところを伝治が止める、それを聞くより村一散に。猫も巣も鳶捕る鷹も、医者や薬と声掛けり呼ぶ。お梅親達それ聞くよりも、徒（かち）や裸足で駈けつけなさる。お梅やいこりゃ苦しゅうはないか、言えばお梅が申することに。わしは死んでも苦しゅうないが、一つ二つの思いがござる。一つの思いは両親さまよ、二つの思いは伝治郎さまよ。そこで両親申することに、お梅よく聞け大事なことよ。われを育てた二人の親は、一人子じゃとて手腹に入れて。荒い風にも吹かせぬように、育て上げたるその甲斐もない。変な所に嫁入りさせて、ひとに□□れた非業な死にざま。秋の稲妻川辺の蛍、灯す油の消えるが如く。とろりとろりと空しくとなる、どうせお梅も無常の風よ。

(9)　おしよ亀松口説

上り詰めたがかみこうじゃくよ、国は筑前遠賀の町よ。坪衛庄屋の太郎兵衛殿は、倉が七軒酒場が九軒。貸屋出店で三十五軒、何についても不足はないが。不足なければ世に世話ござる、子供兄弟持ち置かれして。父は冥土に赴きました。兄が亀松妹がおしよ。兄の亀いは歳十八よ、弾く算盤読み書きまでも。凡そ遠賀に並びはないが、兄の亀いは母様継子。妹おしよは歳十四才、手物縫針織機の道。これも遠賀に並びはないが、妹おしよは自身の子なら。西や東のあの家倉や、北や南のあの田畑を。わが子おしよに皆譲りたい、そこで母様悪事が起きて。神に頼んで盲にしよか、医者に頼んで毒酒を盛ろか。神に頼めば天知る地知る、地知る天知るまた人が知る。人が知りゃまた大事なことよ、いっそそれよりお医者が良かろ。そこでお小夜があいこしらえて、医者の方へはちよこちよこ走り。御免なされよお旦那様よ、言えばお医者も愛想の良さよ。誰かどなたかおしよが母か、上がれお茶飲めお煙草吹かれ。言えばお小夜がさて申すには、御茶も煙草も所望にないが。わしは貴方に御無心ござる、言うたら叶よか叶えてくりょか。言うたら叶えじゃ叶えてやれじゃ。何の御用か早よう語らんせ。言えばお小夜がさて申すには、日頃貴方の知らしゃる通り。わしのうちにはけいぶがござる、兄のかめいが唯憎ござる。小判四十両は今でも出すが、毒な薬を

三服頼む。言えばお医者が飛び魂がりて、何と言わんすこれお小夜さん。医者のもとより語りて聞かす、父の代からお医者をすれど。医者のもとよりなむのりきようの、薬師如来の教えの匙で。人を助ける薬は盛れど、人に毒する薬は盛らん。そん薬は藪医者に頼め、言えばお小夜が腹をも立てて。何と言わんすこれお医者さん、人に大事を語らせ言わせ。薬盛らんとそれ何事か、おのれ見ておれ後日の折に。きっと仕返ししてやるからに、言うてお小夜がつと立ち上がり。裏に回りて雪駄を履いて、木戸を出る出るその悪たれに。医者と見てこそ頼みはすれど、医者の薬で殺さんとても。かめい一人は殺しはかねん、急ぎ急いでわが家に帰る。わが家帰りて横座に座り、長い煙管に煙草を詰めて。煙草吹く吹く思案をなさる、ああれ嬉しや思案もついた。ここでなるまい二階に上がり、二間長持蓋取り開けて。書物取り出す浄瑠璃本よ、昔横山三郎兵衛様が。小栗判官殺した書物、これで殺せば間違いはない。さあさこれから品付見ます、毒な品数百二十八品。山で採る品六十四品、川で採る六十四品。都合合わせて百二十八品、一にいち虫二にきりぎりす。三に山椒の小虫を獲りて、のべるひーばやのべるの胡椒。山で山菊また野で野菊、かんど川魚とのこに泥鰌。柴の葉に棲む一寸百足、蛇の陰干し一のてき薬よ。竹の四節に溜まりた水を、澄まず濁らずまた出ず入らず。柩米にて毒酒造る、毒な酒なら出湧きも早い。宵に造れば夜中に出湧く、夜中造れば日の出に出湧く。造り済まして銚子に入れて、かめい飲めとの三下り半よ。おしよ飲むなと添え書きなさる、奥の戸棚にしっかと囲う。頃は八月彼岸の頃よ、そこで母様お寺に参る。後でおしよは独りの留守に、独り留守なりゃ物淋しさに。いつも探さぬ戸棚を探す、探し当てたがむろみの酒よ。そこでおしよが思いしことよ、これな戸棚にゃ時なら酒。かめい飲めとの三下り半よ、おしよ飲むなと添え書きありて。文字が座りて新たなことよ、これは母様仕業と見える。これをこのまましておいたなら、兄のかめいは非業で死ぬる。母の帰らぬその隙の間に、裏の小池にだぶりと捨てる。そうこうするうち母様帰る、そこでおしよが側には寄りて。申しこれいな母上様よ、お気に召すかはそれ知らねども。わしは貴女に物問いまする、うちの戸棚に時ならぬ酒。ちょうこいはいにかくまいありて、かめい飲めよと三下り半よ。おしよ飲むな添え書きなさる、文字がすわりて新たなことよ。これは貴女の仕業と見える、たとえ

後生は頗わぬとても。悪な企み止め下さんせ、言えばお小夜がさて申すには。何と言うぞやわが子のおしよ、われを育てたその親じゃもの。そなた可愛ゆて致したことよ、西や東のあの家倉や。北や南のあの田畑をば、そちにやるのがそれでも嫌か。言えばおしよが申することに、なんと言わんす母上様よ。兄を殺してこの家（や）がたつか、兄はこの家の大黒柱。兄は殺さずわし殺さんせ、貴女それほど思うとあれば。西を兄さん東をわたしに、分けて下んせ母上様よ。言えばお小夜が腹をも立てて、親に意見を子がするものか。末は後悔するぞよおしよ、おしよお前は馬鹿ではないか。打ちつ叩いつ打ちゃくなさる、たぶさ攫んで引きずり回す。高い縁から突き落される。おしよ泣く泣くわが家を出でる。一の門越え二の門越えて、前の欄かに腰打ち掛けて。ここで死のかと思案をなさる、ここで死ぬるはいと易けれど。ここで死ぬると犬死となる、死なでも一度兄（あに）さん逢うて。今の辛さを語らんものと、越えた門をばまた越え戻る。わが家帰りて二階に上がり、二階上がりて兄さん見れば。兄のかめいは学問好きで、七つ下がれば掛け行灯で。書いつ読みつの稽古を致す、そこでおしよは側には寄りて、申しこれいな兄上さんよ。お気に入るかはそれ知らねども、わしが一言物問いまする。親が親にて世が世であれば、書いつ読みつの稽古も要らん。わしの母様悪事が起きて、貴方殺すと企みなさる。お茶を飲むとも気を付けなされ、ご飯上がるも用心なされ。わしは冥土に赴く故に、思い出したら茶湯と茶水。折れた線香の一本なりと、折れた樒の一枝なりと。立てて下んせ兄上様、言えばかめいが飛び魂がりて。染めた筆をばまた取り落す、さてもそうかな妹のおしよ。わしはここにて腹切り死ぬる、お前長らく生き長らえて。西や東のあの家倉や、北や南のあの田畑をば。取りて母様育みなんせ、言えばおしよが申せしことに。何と言わんす兄上さんよ、西や東のあの家倉や。北や南のあの田畑をば、露や針ほど所望とあれば。親の悪事を子が言うものか、もちと思案もありそなものよ。言えばかめいが思案をなさる、ああれ嬉しや思案もついた。今年霜月母様年忌、母の為なりわが身の為よ。先祖菩提のその為として、六十六部を回ろと思う。言えばおしよも打ち喜んで、貴方六部を回るとあれば。女道連れ邪魔にもなろが、わしも六部のお供を致す。言えばかめいが打ち喜んで、さても届いた妹のおしよ。そこで二人は腹をば合わせ、ここで六部の支度は出来ん。豊前小倉にお

ばさんござる、そこに行てから頼もじゃないか。さあさこれから旅装束よ、東倉にて金取り出して。西の倉から着物を出して、そこで兄妹支度もできて。夜の九つ夜半の頃に、人目忍んで夜抜けをなさる。桧千本また杉の森、それを通れば小倉の馬場よ。まだも急げば桜木峠、へ東は白む横雲の。へ登り上がりて後打ち眺め、おしよあれ見よ遠賀が見える。鳥は古巣に帰るといえど、二度と帰らぬ遠賀の町よ。名残り惜しやと後打ち眺め、向かう遥かに見下ろす町は。あれは豊前の小倉の町よ、町は本町二丁目の米屋。米屋向かいがおばさん方よ、さあさ急いで行こではないか。急ぎゃ程なく小倉の町よ、まだも急げばおば上のかた。ご免なされよおば上様よ。言えばおば様飛び魂がりて。かめい兄妹何しに来たか、輿や車で来そうなものが。徒歩や裸足で合点がいかぬ、国の殿さん承知で来たか。又は両親勘当で来たか、言えば兄妹賢いもので。親の悪事を語らず言わず、国の殿さん承知でも来ぬ。又は両親勘当でも来ぬ、われらとうから六部のよだち。まして霜月母様年忌、母の為なりわが身の為よ。先祖菩提のその為として、六十六部を回ろうよだち。おいの支度をよろしく頼む、言えば伯母さん申することに。なんと言わんす亀松殿よ、まだもおしよは幼少にあるが。旅の空にて疱瘡をすれば、湯干し水干し他人の里よ。そちが介抱するかよ亀松、言えば亀松が申することに。止めてくれるは有難けれど、物の道理をよく聞き分けて。やって下されおば上様よ、竹に雀は止まると言えど。止めて止まらぬ今度の旅は、おいの支度をよろしく頼む。ここで支度ができぬとあれば、大坂上りて支度をなさる。言えばおばさん詮方なしに、小倉町なる大工を雇い。木をも改め従栂欅、切りつ刻んず笈こしらえる。亀松負仏六尺二寸、おしよ負仏三尺二寸。桂八角まんまる柱、前の二本は来迎柱。上の格子は彫物尽くし、金と銀とで塗り分けます。さても綺麗な負仏壇よ、ああら嬉しや笈成就した。そこで兄妹申せしことよ、笈はできたが仏はまだか。言えばおばさん取り急がれて、小倉町なる仏師屋を雇い。木をも改め欅や槙や、紫檀黒檀唐木も寄せて。切りつ刻んず仏も刻む、亀松仏は南無釈迦如来。おしよ仏は十一面の、観世音様据え奉る。両の脇にも同じく仏、笈も仏も皆成就する。そこで兄妹打ち喜んで、急ぎ急いで支度にかかる。背に負い仏前には鉦鈷、命長けりゃ長柄の錫杖。へ天蓋眼深に打ちかぶり、へ前の鈷鉦の音を張り立てて。今日は日も良い小倉の町を、おばの手

引きで托鉢なさる。小倉町なる皆さん方が、世にも六部は数多けれど。さても綺麗なお六部さんよ、五分三分また一匁。これは道中わらんじ銭に、言えばおば様押し載いて。急ぎゃ程なく小倉もしもた、そこで兄妹宮島望む。言えばおば様申せしことに、さきのこととやまだそりゃ早い。みぎのわが家に帰ろじゃないか、言えば兄妹詮方なしに。おばの方には急いで帰る、そこでおば様銭別なさる。小判四十両は盆には積んで、金に不足はあるまいけれど。これは道中わらんじ銭に、致しなされよ兄妹子ども。言えば兄妹押し載いて、まだも亀松にやる銭別は。白の羽二重仕立の小袖、妹おしよにやる餞別は。表羽二重裏緋緞子の、紋は桔梗の大振袖よ。参る所に着て参らんせ、言えば兄妹打ち喜んで〃まだもおばさん申することに、へ西国六部と申するは。へ日に七軒の修行して、朝は五つに宿たつものよ。晩は七つに宿取りなさい、まだもおばさん申することに。申しこれいな亀松殿よ、まだもおしよは幼少にあるが、晩の宿(しゅく)々その宿(やど)々や、船の乗り降り気をつけなされ。言うてその夜は小倉に泊る、明けりゃ兄妹宮島望む、今日はいよいよ船乗りまする。船は小倉の住吉丸よ、そこで二人は船乗りまする。亀松兄妹扇子を上げる、おばは丘から諸手を上げる。船に乗りゃまたとも綱放す、錨取らして帆を巻き揚げる。さらばさらばのお暇乞いよ、順風(おいて)よければなだへを走る。急ぎゃ程なく宮島に着く、安芸の宮島回れば一里。浦が七浦また七蛭子、へ宮島様には御参詣。へうがい手水でわが身を清め、暫し間は拝みを上げる。札所札所に札打ち納め、急ぎゃ程なく宮島済んで。そこで兄妹四国を望む、船は宮島宮吉丸よ。船に乗りゃまたとも綱放す、錨取らして帆を巻き揚げる。順風よければのどかに走る、暫し間は船中なさる。急ぎゃ程なく四国に着いた、へ四国の島では伊予の国。へ伊予の国ではいわらさん、かずら天井やせりわり見事。二十一ごや二十二の橋や、五百羅漢や十六羅漢。奥の院まで札打ち回る、伊予をしまえば高知に回る。米良の稲荷や足摺山や、土佐で西寺また東寺。四国島中札打ち回る、そこで兄妹讃岐を望む。暫し間は道中なさる、急ぎゃ程なく讃岐に着いた。ここに名高い高神(ためがみ)ござる、へ金比羅様には御参詣。へうがい手水でわが身を清め、へ箱段どんどと踏み上がり。へわに口がんがと打ち鳴らし、やがてすりゃ又あなたの前よ。へ賽銭ばらりと投げ散らし、へ高燭台に燈明し。暫し間は拝みを上げる。拝み上げるも殊勝なことよ。さても綺麗

な普請でござる、暫し間は見物なさる。札を納めて下向にかかる、下向致して金比羅町を。へ金比羅町中の托鉢を、へ金比羅町中の人々が。世にも六部は数あれど、さてさて綺麗な六部さん。五分三分又一匁、これは道中わらんじ銭に。致しなされよお六部さんよ、わしが方にもお寄りなさんせ。わしが方にもお泊りなされ、言うてその夜は多度津に泊る。善通寺様にも御参詣、札所札所に札打ち回る。急ぎゃ程なく四国も済んで、そこで兄妹大坂望む。船は讃岐の金比羅丸よ、そこで兄妹船乗りまする。船に乗りゃ又とも綱放す、錨取らせて帆を巻き揚げて。順風よければのどかに走る、次第次第に瀬戸内回る。へ淡路が島を右に見て、へ須磨や明石や壇の浦。あちらこちらと見物なさる、此処は何処よと船子に問えば。此処は一の谷敦盛さまの、み墓所かさておいとしや。急ぎゃ程なく大坂に着いた、大坂着きゃ又さて賑かい。そこで亀松が申することに、申しこれいな妹のおしよ。金に不足はあるまいほどに、大坂町中を托鉢しましよ。名所名所も見物しましよ、言えばおしよも打ち喜んで。大坂町中を托鉢なさる、大坂町中の皆さんがたが。世にも六部は数多けれど、さても綺麗なお六部さんよ。五分三分又一匁、これは道中わらじ銭に。致しなされよお六部さんよ、わしが方にはお泊りなされ。わしの方にもお寄りなさんせ、言うてその夜は大坂に泊る。明けりゃ二人は大坂城の、城の見物天王寺さまや。名所名所を見物なさる、急ぎゃ程なく大坂済んで。そこで兄妹京都を望む、暫し間は道中なさる。急ぎゃ程なく京都に着いた、京で名山愛宕の山よ。京の清水観音さまや、お西お東知恩院寺や。京の浅草観音さまや、名所名所に札打ち回る。へならびに大津の三井寺よ、へ三井寺さまへも御参詣。へ箱段どんどと踏み上がり、へわに口がんがと打ち鳴らす。賽銭ばらりと投げ散らし、へやがてすりゃ又あなたの前よ。暫し間は回向をなさる、札所札所に札打ち納め。奈良の大仏京日光と、名所名所は札打ち回る。急ぎゃ程なく京都も済んで、そこで二人は紀州を望む。暫し間は道中なさる、急ぎゃ程なく紀州に着いた。紀州名山高野にかける、女人堂まで二人がしたが。女人堂にて制札見れば、こんなお山とさて申するは。女人堂まで女もなるが、女同行じゃお山はならぬ。そこでおしよが申することに、わしは此処にて待ちますほどに。貴方一人でお山をなされ、言えば亀松がお山にかける。ほうじようの山八つの峰、へ谷が七谷又尾が七尾。九万九千の御寺寺を、

西の入口東の出口。奥の院まで札打ち回り、札を納めて下向にかかる。急ぎ急いで下りて見れば、妹おしよはただしよんぼりと。遅うござんしたわしゃ待ち兼ねた、さらば行こうか妹のおしよ。そこで兄妹信濃を望む、暫し間は道中なさる。道を行く行く兄妹話、一つ話すも高野の話。二つ話すも高野の話、通りかかるが日坂街道。そこで亀松が申することに、申しこれいな妹のおしよ。笈が重かろさぞ難儀じゃろ、言えばおしよが申せしことに。何と言わんす兄上さんよ、わしの負うたる笈仏壇に。神や仏が座りておれば、神の力か仏の加護か。朝の立ちより笈軽うござる、兄を勇める妹の心。登りかかるが日坂峠、まだも急げばその山峠。そこで二人は笈をば下し、暫し間は休息なさる。そこで亀松が申することに、おしよあれ見よ大井の川よ。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井の川よ。申しこれいな妹のおしよ、わしはお前に相談がある。どうせ信濃に参るとすれば、大井川では難儀をするが。信濃参りは止めよじゃないか、言えばおしよが腹をも立てて。なんと言わんす兄上さんよ、貴方望みの高野にかけて。わしの望みの善光寺さんを、止めよと言うのはわしゃ気にいらん。わしは信濃に御願がござる、貴方信濃は止めるとしても。わしは独りで信濃に参る、言えば亀松も詮方なしに。さらば行こかと仕度をなさる、急ぎ下れば金谷の宿よ。そこで兄妹水装束よ、まだも急げば大井の川よ。〽手に手を取りて渡り込む、〽渡りかかれば哀れなことよ。妹おしよが流れよとすれば、兄の亀松が手を引き止める。兄の亀松が流れよとすれば、妹おしよが手を引き止める。浮いつ沈んず漸く渡る、渡り上れば島田が宿よ。そこで兄妹支度をなさる、兄の亀松は白装束で。表は羽二重裏緋緞子の、紋は桔梗の大振袖よ。帯は当世京六緞子、二重回して下げ帯とする。兄の亀松は散り髪となる、妹おしよは下げ髪となる。背に負い仏前には鉦鈷、命長けりゃ長柄の錫杖。〽天蓋眼深にうちかぶり、〽前の鉦鈷の音を張り立てて。〽暫しはお門で回向する、〽お茶屋の亭主が見るよりも。〽さても綺麗な六部さん、〽わらじ持ちて走り出る。〽これはおろよきものなれど、〽お履きなされよ六部さん。〽二人は手に取り載いて、〽載くその手で笠を取り、〽まず今日（こんにち）の御恩徳、〽わらんじ報捨の志。〽命と御縁があるなれば、〽また逢いましようと茶屋を発つ。〽またその次のお茶屋でも、〽暫しはお門で回向する。〽お茶屋のねえさん見るよりも、〽さてさて綺麗な六部

さん。〽手拭い持ちて走り出る、〽これはおろよきものなれど。〽汗拭きなされよ六部さん、〽二人は手に取り戴いて。〽戴くその手で笠を取る、〽まず今日の御恩徳。〽手拭い報捨の志、〽命と御縁があるなれば。〽また逢いましようと茶屋を発つ、〽三軒茶屋となるなれば。〽暫しはお門で回向する、〽ご免なされと笠を取り。〽まだもご免と敷を越え、〽お許しなされと笈下ろす。〽お茶屋の亭主が見るよりも、〽世にまた六部は多けれど。〽さてまた綺麗な六部さん、〽お国は何処でござんすか。〽夫婦で六部を回るのか、〽おとどい二人でござんすか。〽お年はいくつでござんすか、〽名前は何と申します。言えば兄妹涙で語る、お国問われて恥しゅうござる。〽お国を申せば筑前の、〽遠賀の郡は御門口。小村申せばかみこうじゃくの、〽庄屋のせがれでございます。〽夫婦の六部でありません、〽おとどい二人でござんする。〽その名はおしよと亀松で、〽今年が十四と十八よ。〽言えば亭主が打ち驚いて、〽世にまた不思議なこともある。〽わしにも二人の子供あり、〽その名がおしよと亀松で。〽今年が十四と十八で、今年春先疱瘡がはやり。はやる疱瘡に二人がしつき、〽兄妹共にとりとばし。〽今日と明日との当たり日なれば、まことわが子の帰りし如く。〽お泊りなされよ六部さん、〽仏前にて回向を頼む。そこで亀松が申せしことに、申しこれいな妹のおしよ。〽まだ今日は早七つ、〽まだも急げば一里は行くが。もちと行こうか妹のおしよ、言えばおしよが申せしことよ。なんと言わんす兄上さんよ、〽小倉の町のおばさんの。〽言わしゃんしたることがある、〽西国六部というものは。〽日に七軒の修業して、朝は五つに宿発つものよ。晩は七つに宿とるものと、言うたでないかよ兄上さんよ。宿をとらんせ兄上さんよ、言えば亀松がお宿を頼む。宿の亭主も打ち喜んで、亀松負い仏床の間立てる。そこで兄妹支度を解いて、うがい手水でわが身を清め。ご免なされと仏陀の前よ、〽高燭台に灯をともし。〽亀松音頭でじよう念仏で、姉おしよは連れ念仏よ。宿の亭主も伴念仏よ、そこで二人は回向も済ませ。そしてその夜はお茶屋に泊り、明けりゃ信濃の善光寺参り。宿の亭主の道案内で、暫し間は道中なさる。信濃町をば通りて行けば、道の脇には阿弥ケ池よ。それを通れば善光寺さまよ、うがい手水でわが身を清め。〽箱段どんどと踏み上がり、〽わに口がんがと打ち鳴らし。やがてすりゃまたあなたの前よ、〽賽銭ばらりと投げ入れて。〽高

燭台に灯をともす、暫し間は回向をなさる。拝み上げるも殊勝なことよ、回向しまえば見物なさる。さても綺麗な普請でござる、東門跡西御門跡。北と南に日暮らしの門、前と後は金銀尽くし。四方四角は彫物尽くし、人もだんだん参りしけれど。人の憂目を知らざる者は、こんな彫物よう名を付けけん。おしよ亀松はそれしゃであれば、これな彫物よく名をつける。唐の鶏日本のやがら、へ雪折れ笹に群雀。へぱっと舞い立つまた舞い戻る、宝珠玉取る鯉の瀧上り。それと見るうちおしよが病気、申しこれいな兄上さんよ。みぎの宿屋に帰ろじゃないか、言えば亀松が打ち驚ろいて。すぐにこのこと亭主に話す、言えば亭主も打ち驚ろいて。急ぎ急いでわが家に帰る、そこで亀松が申することに。申しこれいなご亭主さまよ、金子に不足はあるまいほどに。医者の手引を宜しく頼む、言えば亭主も届いた人で。田舎薮医者町御典医を、雇い寄せたが三十五人。三十四人は手を尽せども、おしよが病気によう名を付けけん。あるが中にも年増なお医者、おしよ病気によく名を付ける。旅の疲れが疱瘡の度熱、最早疱瘡もありありわかる。さても疱瘡が根ざしが悪い、顔にぼりたがうつぎのみ疱瘡。胸にぼりたが百足の疱瘡、腹にぼりたが高きり疱瘡。足の節々に、急所急所に釘抜疱瘡。どうせおしよは難しゅうござる、申しこれいな亀松殿よ。薬水より介抱が大事、介抱大事に致せよ亀松。言うてお医者はわが家に帰る、後で哀れは亀松でござる。おしよ病気の側には寄りて、膝を枕に致せよおしよ。苦しかろうと髪撫で上げる、咽喉が乾いてさぞ辛かろう。今度一度は病み抜けおしよ、今度病気を病み抜いたなら。伴れて帰るぞ遠賀の町に、言えばおしよが申せしことに。重き枕を漸く上げて、なんと言わんす兄上さんよ。家を出る時どう言うて出たか、鳥は古巣に帰るといえど。二度と帰らぬ遠賀の町と、言うてわが家を出たではないか。わしは死んでも遠賀にいなん、晩の七つにわしゃ死にまする。まだも心の確かな折りに、形見おくりの言置きします。申しこれいな兄上さんよ、わしの負うたる笈仏壇の。一の下段に小判が百両、これは私を葬むる寺に。上げて下され兄上さんよ、まだも下段に小判が四十両。これは私を診たてた医者に、まだも下段に小判が五十両。これはこの家のご亭主さまに、下の下段に大振袖が。表羽二重裏緋緞子の、紋は桔梗の大振袖よ。古きものではありますけれど、二十四ケ国回りた小袖。これは宿元ご内儀さんに、おしよ形見と上げ下さんせ。肌の守り

とびんなる髪は、わしが挿したるたいまの櫛と。二十四ケ国回りた札は、これは小倉のおば上様に。おしよ形見と贈りて給え、まだも兄さん貴方に形見。四寸鉦鈷に五寸の鏡、うがい手水でわが身を清め。わしの姿が見たいとあれば、五寸鏡を立てさせ置いて。四寸鉦鈷を打ち鳴らせば、四方八方鳴り分けまする。生きたお声を聞くよな如く、わしの姿もありあり分かる。言うておしよも頭を下げる、秋の稲妻川辺の蛍。後つけし灯籠も消えるが如く、眠る如くに消え行きまする。後で哀れは兄亀松さん、天に仰ぎて地に体ふせて。死んだおしよに取り付きすがり、なんで死んだかおしよ。泣くも嘆くも亀松が一人、愛し可愛いや無常の風に。〽誘われ行く身の哀れさよ、宿の亭主も気は仰天し。申しこれいな亀松殿よ、なんぼ泣いても嘆いたとても。死んだおしよは帰りはすまい、野辺の送りを致そうじゃないか。言えば亀松がさて申すには、申しこれいなご亭主さまよ。金子（かね）に不足はあるまいほどに、野辺の送りは華かに頼む。言えば亭主も届いた人で、二十四ケ国回りた札を。持ちて公儀に注進なさる、申しこれいなお公儀様よ。ここの道理を宜しく頼む、国は筑前遠賀の町の。坪衛庄屋の二人の者が、六十六部を回りしうちに。わしが一夜の宿泊め置いて、妹おしよが病気にしつき。医者もだんだん手を尽くせども、妹おしよが相果てました。どうぞ此の儀を宜しく頼む、言えば公儀も届いた人で。そなた願いは神妙なことよ、死んだおしよは詮方はない。大事ないない心配するな、野辺の送りは華やかに致せ。言えば亭主も打ち喜んで、急ぎ急いでわが家に帰る。わが家帰りて亀松を見れば、兄の亀松はただ泣くばかり。そこで亭主が申すことに、公儀様より仰せの通り。野辺の送りを済ましよじゃないか、野辺の送りを致すといえば。お寺さまにも届けにゃならん、そこで亀松に宗門問えば。おしよもとより禅宗門で、禅宗お寺に届けを致す。信濃町なる大工を雇い、木をも改め上木（じょうぎ）を寄せて。切りつ刻んず棺こしらえる、棺は立棺四方は朱塗り。四方四隅は錦で包み、棺の四隅につばさの鳥よ。〽天まく地まく四方まく、〽旗や天蓋龍龍（りゅうたつ）までも。風に靡かせ殊勝な送り、もみの善綱七反引いて。禅宗お寺を七ケ所よんで、和尚ばかりを七人寄せて。それに付添うふじ坊さんは、なんぼあるやら積りは知れん。まして信濃の皆様方が、われもおれもと皆供につく。おしよ山入り賑やかなこと、〽葬式半ばに不思議あり。〽空に五色の雲かかる、おしよ十四の観音となる。おしよ墓所は

新小松原、　野辺まで供は多けれど。へ野辺から先はただ独り、急ぎゃ程なく山入り済んで。七日間(あいだ)は憂いの座敷、そこで亀松が思案にくれる。死んだおしよが可愛いさあまり、少しばかりの地面を求め。自身一夜の住家となして、おしよ菩提を弔いせんと。おしよ墓所のその傍に、二間四間の寺庵を願う。ああれ嬉しや願いも叶うた、そこで信濃の大工を雇い。木をも改め縦栂欅、切りつ刻んず寺庵を建てる。四方柱は縦栂桧、天井張る板紅葉や銀杏。四方四隅は彫物尽し、それに祀るは二人の仏。亀松仏は南無釈迦如来、おしよ仏は十一面の。観世音菩薩を寺庵に祀る、仏前板彫物見れば。龍(りゅう)と龍(たつ)とを彫り分ける、金と銀とで塗り分け致し。さても奇麗な寺庵もできた、そこで亀松も打ち喜んで。明日は日もよし寺庵に移る、文珠四郎という剃刀で。出家浄土の髪剃り落とす、夜と昼とに常念仏よ。庵のまわりは賑やかなこと、金の灯籠がただ三方に。これは本町米屋の寄進、これは七七四十九日まで。灯しまするがおしよに寄進、銀の灯籠が十七本よ。これは内町阿波屋の寄進、これも七七四十九日まで。灯しまするがおしよに寄進、石の灯籠が三十五本。これは信濃の若い衆方が、これも七七四十九日まで。灯しまするがおしよに寄進、紙の灯籠はその数知れず。これも七七四十九日まで、灯し明かすがおしよに寄進。人は一代名は末代よ、水の流れと人間の身は。何処のいずこで果てるや知れん、おしよ信濃の野の土となる。よいさ東西音頭が終わり。

(10)　切り音頭

エーエーエー、切りましよや。エイコーノサーンサ、さんさ揃えて本調子。エーイコノサンサー、しっかりきりりの。若の松さまはな、枝も栄え葉も繁る。ヤレコノエ。

(11)　地蔵和讃

帰命頂礼地蔵和讃、一つ二つや三つや四つ。へ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀　(以下二句ごとに南無阿弥陀仏が入る)。十よりうちなる幼な子が、一度(ひとたび)娑婆に生まれ来て。綾や錦を着飾りて、この世ばかりが着飾りか。死して冥土に行く時は、綾や錦を脱ぎ捨てて。経帷衣を一重着て、くろかけ数珠をば手に掛けて。死すればそのまま野辺送り、野辺までこそは供もあり。野辺から先は只一人、先を見れども連れもなし。後を見れども供もなし、声聞くばかりがほとときす。音聞くばかりが谷の水、上り詰めたが死出の山。三途の川も渡りかね、七日七日が七七日。三十五日は弔(と)わずとも、

四十九日は弔い給え。四十九日の当たり日に、えんまの前に迷い来て。七重の膝を八重に折り、紅葉のような手をついて。白き頭を地につけて、通らせ給えよえんまさん。お助け給えよ阿弥陀さん、導き給えよ地蔵さん。えんま大王申すには、これこれそちの幼な子よ。そちには三つの科がある、さてまた一つのその科は。親に耐えなん九の月、十月間の苦労みせ。これが一つの科となる、さてまた一つのその科は。親に抱かれて乳（ち）をくわえ、胸どきどきと叩くのが。八幡地獄の底までも、響き渡るぞ幼な子よ。これが二つの科となる、さてまた一つのその科は。父の御恩の高いのは、須弥仙山よりまだ高い。母の御恩の深いのは、東の海よりなお深い。極楽とてもやられまい、地獄とてまたやられまい。賽の河原の砂手本、一つや二つや三つや四つ。十よりうちの幼な子が、賽の河原に集まりて。河原の石を拾い寄せ、これこそ回向の塔をつぐ。一重ついでは父のため、二重ついでは母のため。三重ついでは故郷の、兄弟わが身の回向となる。昼は独りで遊べども、日の暮れ方のその頃に。苛責の鬼が現われて、ついだる塔を突き崩す。父上恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は。この世の声とは声違い、賽の河原の物語。南無阿弥陀仏と諸共に、地蔵和讃も終わりなり。

(12) 七つ子和讃

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀（以下二句ごとに南無阿弥陀仏を入れる）。帰命頂礼七つ子和讃、父は奥州出羽の国。母は九州豊前なる、七つ子播磨の書写育ち。父に離れ三年の、母に離れて今日七日。七日七夜を泣き明かす、岩に生えたる岩松は。岩を頼りに育とうが、水に生えたる浮き草は。水を頼りに育とうが、七つといえども幼な子よ。幼な子どうして育とうか、あまりわが身の切なさに。六十六部を思い立ち、三年三月に成就して。わが故郷に帰り来て、父のみ墓に参りなば。父のみ墓は山となり、母のみ墓に参りなば。母のみ墓は藪となる、郷里兄弟あるなれば。これほど山にはすまいもの、これほど藪にはすまいもの。七月七日のことなれば、腰には鎌をしのぎさし。去年の草は鎌で刈り、今年の草は手でむしる。突いたる杖を柱とし、かむりし笠を屋根として。高い所に香を立て、低い所に花を立て。手には数珠かけ眼に涙、鉦鉗の鉦をはり立てて。暫し間は回向する、南無阿弥陀仏と諸共に。七つ子和讃も終わりなり。

(13) 花田和讃

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀（以下二句ごとに南無阿弥陀仏を入れる）。帰命頂礼花田和讃、抑々都の傍に。るいしという女人あり、世継の男児をもうけして。勇み出で行くその時に、しするという字があればこそ。死して帰らぬ死出の旅、わが子に離れてその辛さ。枕引き寄せ寝てみれば、夢には見れど眼には見ず。七月七日が七七日、三十五日は弔わずとも。四十九日は弔い給え、四十九日の当たり日に。今日は花田の寺参り、花田の寺に参り着き。うがい手水で身を清め、箱段どんどと踏み上がり。わに口がんがと打ち鳴らし、賽銭ばらりと投げ込んで。暫し間は回向する、寺のしよえんに腰を掛け。花をつれづれ眺むれば、咲きたる花は散りもせず。蕾の花の散るを見て、よもやわが子もあの如く。ゆうべわが家にありしたが、今宵は野原の土となる。南無阿弥陀仏と諸共に、花田和讃も終わりなり。